

第一回研究会報告

文責 吉田ゆか子

まず初めに代表者の吉田より、研究会の主旨や研究会のメンバー構成、審査会にてよせられた審査員からの助言等を報告した。また本研究会と連動した科研費を獲得したため、それを活用した、成果論集出版等の活動を提案した。

その次に、各メンバーたちからの自己紹介を含めた、研究紹介がなされた。日本を研究しているメンバーはこの状況下でも日本の民俗芸能や古典芸能についての調査を進めており、多くの貴重なデータを収集していることがわかった。そのなかでは、一見コロナ状況を理由に行われていること（延期、縮小、あるいは逆にコロナ退散を願った上演の活性）も、その他の様々な要因と絡まり合っており、単純化してしまうことには危険があることも指摘された。例えば、コロナ状況下において活動が停滞しているように見える行事や芸能は、コロナ状況以前から別の要因で伝承の難しさを抱えていたというケースもあり、コロナ状況はそれをより顕在化させたとみる方が適切な場合も少なくないという。海外を研究対象としている者たちには現在オンライン以外の調査が難しい状態ではあるが、こうした国内組の報告によって、微細な情報をひろいながら丁寧にフィールドワークを行っていくことの重要性を改めて確認することとなった。

欧米の舞台芸術からアジアの古典／民俗芸能、ポップス、そしてストリップまで多様なジャンルが研究対象として言及された。また演者だけでなく、芸能を支える様々なアクター（例えば、アートマネージャー、芸能に必要な道具を作る職人、学校、助成や補償金等）に目を向ける重要性についても語られた。

芸能活動のオンライン化は多くのメンバーに関わる、一つの重要なトピックである。グローバルなネットワークの中で以前からオンライン化が顕著だったインド舞踊の例や、コロナ状況を契機に、オンライン化できない部分、すなわち密な身体的相互行為の重要性に改めて気づかされるバリ芸能の例も報告された。また、ネット格差も考慮する必要がある、ネットにアクセスのない人たちがどうしているのか等を追うことの重要性も指摘された。

調査方法に関連しては、その他、一つの地域を継続的に調査すること、一人のパフォーマーの変化を追うことも有効であることが指摘された。くわえて、過去の大規模災害（東日本大震災や SARS の感染拡大）の時と比較するという分析視点も提案された。